

# 今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

竹内 洋 著

## 『革新幻想の戦後史』

(2012年 中央公論新社)

### 過激な主張の君臨

世間は60年も昔のことは忘れる。「旭ヶ丘中学校事件」といっても、今では知る人はいない。ましてや3Mといった符牒が通じることもない。しかし戦後の一時期、東大教育学部の教授達が革新勢力と手を結び、革新的イデオロギーをもって日本の教育界に君臨した時期があった。私個人は3Mと呼ばれた人物一人ひとりを個人的に知っているが、いかにも良家の生まれという雰囲気や漂わせた人達だった。たまたま目の前を横切った幻想に魅せられてしまった人達という感を、未だに拭い去ることができない。一方では体制変革を説きながら、スクラムを組む姿はぎこちなく、いかにも身につけていなかった。しかし3Mと呼ばれた当人達以上に教条的で、より過激だったのは、その取り巻き連中だった。彼らははるかに先鋭な主張を吐き、自分達と意見を異にする人々を捕まえては、集団的な圧力を加えていた。革新幻想に取りつかれてしたのは、当の3Mよりもその取り巻き連中のほうだった。

その当時、高杉一郎という作家が『極光のかげに』(1950年)を発表したが、それはシベリア抑留生活の惨状を描いた本だった。ところが出版直後から高杉は様々な迫害に晒された。「偉大な政治家スターリンをけなして、けしからん。こんどだけは見のがしてやるが」と、高圧的な態度で脅されたという。またある文学団体は高杉をコーラス・グループの練習場であるバラックに呼び出し、集団的なつるしあげを加えたと記録している。

### 革新幻想から現実へのめざめ

終戦直後の10年ほどは、あたかも明日にでも共産社会が実現されるかのような革新幻想が、大学のキャンパスを跋扈していた。それに疑問を呈する学生は「プチブル」、「保守反動」、「日和見」、「無知蒙昧」と批判され、それを克服するために自己批判が強制される異常な時代だった。



しかしいったんキャンパスの外に目を向ければ、庶民生活は少しずつ豊かになり、多くの庶民はその変化にほのかな期待を抱いていた。世間はいつ出来るか分からない新たな社会体制よりも、少しずつ目に見えてくる生活の改善に期待を膨らませていた。つまり学生達が吹き込まれた革新幻想と、一般庶民の抱く現実感覚は全く食い違っていた。大学のキャンパスだけが浮き上がっていた時代だった。だから学生は大企業に職を得ると、いとも簡単に「就職転向」していった。

### 幻想の捏造と裏切りの罪深さ

人間は誰も幻想を抱く。恐れるべきはその幻想に凝り固まり、それ以外のことが見えなくなることである。政治の世界とはたえず「チェンジ」、「変革」、「革新」、「維新」を連呼する競技場で、常に何がしかの不満をあぶり出し、それを克服するという幻想をばらまき、それでもって選挙民の人気を煽り立てるワイドショーである。そして市民は期待をその度に裏切られる。つまり政治とは革新幻想の捏造とその裏切りが、際限なしに繰り返される舞台である。

戦後といっても既に70年近くなると、その当時の体験者は少なくなった。本書の読者もまた「へー。そうだったの」という気分で読む世代と、「いや違う。真相はこうだった」と反論したい世代とに分かれることだろう。本書の著者は恐らくその両者を眺められる最後の世代なのだろう。戦後教育の精神を信じた世代は次々と鬼籍に入り、むしろ今ではその被害者が真相を語り始めている(例えば原武志『滝山コミュニティー九七四』(2007年))。

最後に大衆もエリートも溶解してしまい、些細なことにクレームをつける大衆と「テレビ文化人」が猛威を振るう時代の登場を予感している。実現できもしない幻想だけを振りまくことが、いかに罪深いことか、これが本書の時代を超えた訴えである。